



JAPANESE A2 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A2 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A2 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Tuesday 21 May 2002 (afternoon)

Mardi 21 mai 2002 (après-midi)

Martes 21 de mayo de 2002 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Section A consists of two passages for comparative commentary.
- Section B consists of two passages for comparative commentary.
- Choose either Section A or Section B. Write one comparative commentary.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- La section A comporte deux passages à commenter.
- La section B comporte deux passages à commenter.
- Choisissez soit la section A soit la section B. Écrire un commentaire comparatif.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- En la Sección A hay dos fragmentos para comentar.
- En la Sección B hay dos fragmentos para comentar.
- Elija la Sección A o la Sección B. Escriba un comentario comparativo.

問題 A か問題 B のどちらかを選び、答えなさい。

問題 A

次の二つの文章の共通点や相違点、主題について論じなさい。その際、筆者が自分の考えを読者に伝えるために用いている文の構成、語調、言葉の象徴するもの、文体などの要素を考えに入れなさい。

テキスト 1 (a)

富士

重箱のように
せまっ苦しいこの日本。

すみからすみまでみみちく
俺達は数えあげられているのだ。

5 そして、失礼^{せんぱん}千万にも
俺達を召集^{しょうしゅう}しやがるんだ。

戸籍簿^{こせきぼ}よ、早く焼けてしまえ。
誰も、俺の息子をおぼえてるな。

息子よ。この手のひらにもみこまれている。

10 帽子の裏へ一時、消えている。

父と母とは、裾野^{すその}の宿で
一晚じゅう、そのことを話した。

裾野の枯林をぬらして
小枝をビシビシ折るような音を立てて
15 夜どおし、雨がふっていた。

息子よ。ずぶぬれになったお前が
重たい銃^ひを曳きずりながら、喘ぎ^{あえ}ながら
自失したようにあるいている。それはどこだ？

どこだかわからない。が、そのお前を
20 父と母があてどなくさがしに出る
そんな夢ばかりのいやな一夜が
長い、不安な夜がやっと明ける。

雨はやんでいる。
息子のいないうつろな空に
25 なんだ。糞面白くもない
洗いざらしたような
富士。

(金子光晴「富士」、詩集『蛾』より、1944年頃の作品) 現代仮名遣いに変更。

(注) 金子光晴(1895-1975) 詩人。軍事支配の重圧に抵抗する詩を書き、当時は疎開により富士山麓に住む。

テキスト1 (b)

清二はこの街全体が助かるとも考えなかったが、川端に臨んだ自分の家は焼けな
いほしいといつも願っていた。三次町に疎開した二人の子供が無事でこの家に戻
ってきて、みんなでまた河遊びができる日を夢見るのであった。だが、そういう日
が何時やってくるのか、つきつめて考えれば茫としてわからないのだった。

5 「小さい子供だけでも、どこかへ疎開させたら……」康子は夜毎の逃亡以来、し
きりに気を揉むようになっていた

「早くなんとかしてください」と妻の光子もその頃になると疎開を口にするので
あったが、「おまえ行って決めてこい」と清二はすこぶる不機嫌であった。女房子
供を疎開させて、この自分はこの家でどうして暮らしてゆけるのか、まるで見当が
10 つかなかった。どこか田舎へ家を借りて家財だけでも運んでおきたい、そんな相談
なら前から妻としていた。だが、田舎のどこにそんな家が見つかるのか、清二には
まるで当てがなかった。(中略)

あれを片付けたり、これを取りちらかしたりした揚げ句、夕方になると清二はふ
いと気を変えて、釣竿を持って、すぐ前の川原に出た。この頃あまり釣れないので
15 あるが、糸を垂れていると、一番気が落ち着くようであった。……ふと、トットト
トットトという川のどよめきに清二はびっくりしたように目を見開いた。何か川を
見つめながら、先程から夢を見ていたような気持がする。それも昔読んだ旧約聖書
の天変地異の光景をうつらうつら辿っていたようである。(中略)

高子は晴れ晴れした顔で戻ってきた。「あの辺の建物疎開はあれで打ち切ること
20 にさせると、田崎さんは約束してくれました。」

こうして、清二の家の難題もすらすら解決した。と、その時ちょうど、警戒警報
が解除になった。「さあ、また警報が出るとうるさいから今のうちに帰りましょう」
と高子は急いで外に出て行くのであった。

暫くすると、土蔵わきの鶏小屋で二羽の雛がてんでに時を告げ出した。その調子
25 はまだ整っていないので、時に順一たちを興がらせるのであったが、今は誰も鶏の
啼く啼き声に耳を傾けているものもなかった。暑い陽光が百日紅の上の、静かな空
に漲っていた。……原子爆弾がこの町を訪れるまでには、まだ四十時間あまりあっ
た。

(原 民喜「壊滅の序曲」1949年)

(注) 原 民喜は、小説家。1945年 8月、広島で原子爆爆弾の被害を受ける。
「疎開」は、空襲・火災などの被害を少なくするため、人口や建物を分散すること。

問題 B

次の二つの文章の共通点や相違点、主題について論じなさい。またその際、筆者が自分の考えを読者に伝えるために用いている文の構成、語調、言葉の象徴するもの、文体などの要素を考えに入れなさい。

テキスト 2 (a)

(言語に対する感覚は) 風土も影響する。日本文化は多湿多雨の気象に敏感で、うっとうしいことを嫌い、さわやかに淡白、あっさりしたものを好む。「白」は最も美しい「色」と感じられる。言葉でも好ましい連想はもちろん大切にされるが、垢のようなものがたまっていた言葉は洗濯して白くしてやらなくてはならないと感じる。

- 5 好ましくない連想を捨てることに我々ほど熱心な民族は少ないかもしれない。

「白い言葉」には外来語が適している。初めは全く連想がないから、自由な使い方ができる。いかにもさわやかである。商売をする人なら、ねらいとするどんな感じでもこれには付与することができて便利だ。

- 10 ある日本語に堪能なイギリス人が、日本語を使っている時はなんだか金銭のことを口にしにくい、ということを漏らしている。日本語で、「報酬は幾らくれますか。」と聞くのは何となく相手の心を傷つけるようで遠慮される。それを「ここ、ペイはどうなっていますか。」とすると、気まずさが幾らかでも減じるように思われるから不思議だ。

- 15 新しい社会の人間関係ができてくると、これまでの言葉のままでは摩擦を生じやすいことが起こってくる。外来語はその潤滑油の役割を果たすことが少なくない。勤め先の上役のことをさまざまなニュアンスをこめて呼ぶことのできる「ボス」も便利で、これに代わる日本語はちょっと見当たらずだろう。また愛好者のことを「マニア」と言うのがはやっている。もともとの「マニア」には批判的な感じがあるけれども、それが切り捨てられて、「マニア」と呼び呼ばれて喜ぶ風があるのもおもしろい。

- 25 日本人の外来語好きの理由はいろいろあるが、表面的な、コンプレックス・虚栄心といった理由よりも、一皮下にある「白い言葉」を求める心が問題であると思われる。あからさまな言い方で相手を強く刺激しすぎない配慮といったものからの使用に目を向けるべきではなかろうか。外来語にもやはり日本人の繊細な言語感覚が反映しているということだ。でたらめに外来語を振り回しているのではなさそうである。

(外山滋比古『日本人の言語感覚』、一部、漢字仮名遣いなど変更して使用。)

テキスト 2 (b)

「揺れる日本語」 対談 言葉と時代

- 井上 役所が横文字を一番使うようですね。何とかプロジェクトだの、かんとかりーディングプランだのと。日本語の中心をなすのは題名語ですから、題目さえ出せば、あとはどうでもいいようなところがあります。横文字の題目を出されたら、中身をよく検討する必要があります。
- 5 加藤 日本人は事態を説明するのによくカタカナ語を使いますね。例えば「シーレーン」なるものは、だれが何を運ぶための道なのかははっきり言わないで、ただ「シーレーン」の防衛という。意図的なすり替えじゃないですか。PKFもそうでしょう。何の省略でどんな意味なのか、分かっている人は意外に少ないと思う。
- 10 井上 もともと外来語が氾濫している中でああいう言葉が入ってくるんだから油断ならない。
- 加藤 なぜ外来語が氾濫するんでしょう。いろいろ理屈はあるんでしょうが、良いものは欧米だというコンプレックスがある。
- 井上 桃源郷とうげんさうやすばらしいものは、常に国の外にあると思っているからじゃないでしょうか。
- 15 加藤 日本語で言える事を日本語で言わないのは母国語に対する愛情が薄いからだと思うな。
- 井上 人間に対する愛情とかも関わってきます。「国際化」するのがそれほど大事なら、日本に現に來ている外国人労働者とうまく付き合えるかどうかが目前の問題なのに、そこを飛び越えて突然、夢見がちになってしまう。
- 20 加藤 言葉が変わるのは当たり前だし、他国語だって変わっていく。しかし、破壊されているというのは、また別だ。
- 井上 一つ一つの言葉に、これまでの日本人の思いが様々に注ぎ込まれている。それを壊してしまっっては、何も再生できません。 (中略)
- 25 主語をできるだけ使わずにすます日本語が主体性ぬきの行動をとらせているかも知れませんし、言語は思考や行動を決定するというのはその通りですね。
- 加藤 日本語はあいまいだという人がいますね。それには反対だな。使い方の問題なんです。あいまいな使い方をして許されるという社会的な通念がある。少なくとも英語と同じ程度には日本語でも正確に表現できる。日本語は表現能力が
- 30 幅広い言葉ですから。

「揺れる日本語」 対談 言葉と時代

加藤周一（評論家）、井上ひさし（劇作家）

(1993.1.1. 朝日新聞)